

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目	近代日本語における「欧文脈」の成立 ——中国語との対照を視野に入れて
氏 名	白 楊

論 文 内 容 の 要 旨

幕末・明治期において、文明開化の必要に応じて、欧米諸国の新しい概念や言葉が日本語に参与することになった。このような歴史的な背景をもとにして、翻訳が数多くなされることになり、訳語が数多く作り出された。日本語の語彙においては、大量の新語が増え、著しく変容がもたらされた。これらの「新漢語」はのちに中国に伝えられ、現代中国語にも大きな影響を与えたのである。

近代語彙の成立についての研究には、手島（2001）や李（1995）などのように特定の人物による造語についての研究もあるが、一つの分野の用語を取り上げた石塚、柴田（2003）、荒川（1997）などもある。また、幕末・明治期の新語・訳語の語史を個別的に検証する研究として、広田（1969）、斎藤（1977）、鈴木（1981）、柳父（1982）、佐藤（1983）などがある。更に、樺島・飛田（1984）、惣郷・飛田（1986）と佐藤亨（2007）などでは、明治から昭和までの新漢語をそれぞれ、800語、1341語、4500語収録し、全面的に調査するものもある。新漢語に関する研究が盛んに行った上で、日中語彙交流についての研究大きな関心を集めた。例えば、沈（2008）、朱（2003）、千葉（2010）などが挙げられる。

しかし、日中両国では近代語彙の研究が研究者たちの注目を多く集めた一方、近代語法についての研究はそれほど多くはない。本研究は、現在まで注目を集めていない近代語法の成立に着目し、近代語法の成立を明らかにしたうえで、日中両言語における近代語法の交流について明らかにすることを目的とし、調査を行った。

具体的には、近代語法の研究では指摘される「欧文脈」を中心に、中国語の「欧化語法現象」と対照し、その共通点を持つ語法を研究対象とする。第一章では、森岡（1999）、王（1956）、謝（1990）、賀（2008）などの先行研究を対照し、「欧文脈」と「欧化語法現象」において、最初に取り扱われた代名詞に着目する。また、中国語との対照を視野に入れるため、森岡（1999）に挙げられた代名詞の中には、漢字表記

の第三人称代名詞「彼・彼女」、再帰代名詞「自身・自己」、不定代名詞「一、一個、一部」などを本研究の研究対象とする。そして、第一章で得られた研究対象は第二章以降の各章で、それぞれの成立について個別に検証した。

第二章では、第三人称男性代名詞「彼」の成立過程について、幕末・明治期の対訳辞書・国語辞書を調べ、読本直訳資料、雑誌・新聞から用例を収集し、考察を行った。森岡（1999）は、「彼」の成立が明治 20 年代初めであると述べるが、本研究の調査によれば、「彼」が第三人称代名詞として多用されるようになったのは明治 40 年以降であり、当時は性的な区別がせず、男女両方を指し示した。「彼」が専ら男性に使用されるようになったのは、大正以降「彼女」という語が成立してからであると考えた。

第三章では、第三人称女性代名詞「彼女」の成立過程について考察を行った。明治期の雑誌では、「彼女」が多く見られるが、ルビが多様であり、「かのじょ」に統一されるようになるのは大正に入ってからであった。また、新聞では、「彼女」は明治まで使用されず、初めて目に入ったのは大正以降であった。「彼女」の成立は大正期であると考えた。一方、「彼女」の国語辞書での立項がさらに遅くなり、昭和 30 年であった。「こいびと」を意味する名詞の「彼女」の定着が、「彼女」の国語辞書での立項の要因であると考えた。一方、中国語では、第三人称女性代名詞は、日本語のように、一語化した語（「彼（の）女」→「彼女」）を採用せず、一字の「她」が定着した。その理由は、中国語では基本語彙の単位が一字であるという性質にあると考えた。

第四章では、接尾語的な「～自身」の成立について考察を行った。「自身」は古くから見られる語であったが、名詞に後接して接尾語として使用されるようになるのは明治以降である。直訳資料と雑誌においては、「myself/yourself/himself」などの翻訳により明治 20 年以降「人称代名詞＋自身」が多く現れるようになった。明治期の直訳資料と雑誌で多く見られるものの、対訳辞書では「人称代名詞＋自身」は明治期まで見られない。その理由は、英華字典の影響で、明治期までの対訳辞書では「-self」の訳語として専ら「～自己」が使用されたことであると考えた。「～自身」が対訳辞書で定着するようになるのは大正以降であった。国語辞書で「接尾語的な「自身」」のような記述が見られるのはさらに遅い。最初に見られるのは『広辞苑』第三版（1983、昭和 58）である。

第五章では、「自己」及び接頭語の「自己〇〇」の成立について考察した。「汝自己」などの「～自己」は、明治期の対訳辞書では「-self」の訳語として使用されていたが、散文資料では使用されていなかった。新聞では、「自己」は明治 33 年以降「自己〇〇」のように使用されるようになる。但し、当期に独立的に使用される「自己」は「おのれ」と読み、複合語で使用される「自己〇〇」は「じこ」と読むというように使い分けられた。「自己〇〇」のような複合語の大量生産が「自己」の定着の要因であると考えた。

第六章では、不定を表す連体詞「一」を中心に、「一＋N」の表現について考察した。日本語では、不定を表す連体詞「一＋N」の用法は、幕末・明治期に入って西洋語の「a/one」の翻訳の影響により、明治初期の漢文訓読（直訳）体の文章で多用された。西洋語「a/one」の翻訳の需要と漢文の影響で、「一」は、従来助数詞に前接する性格を生かし、普通名詞に前接するようになる。特に、「一＋二字・多字漢語」が多く見られるようになった。但し、言文一致運動と「漢語・漢字離れの進行」の影響の下で、「一＋N」の語の使用が減少し、専ら文章語となっている。

第七章では、「一個・一個人・個人」を中心に、「個人」という語が成立するまでの過程を考察した。「一個」は中国由来の数量詞であり、「一個人」は近世中国語で多く使用された表現である。「一個人」は「ひとりの人」の意味で、individual の訳語として一時定着したが、後に「個人」に取り替えられた。その原因は、「社会・国家・家庭」などの対義語として、二字の「個人」の方がより対称的な関係になることに加え、「個人主義」など、「個人〇〇」の造語を生産する際に、数詞を持っていない「個人」がより便利であるためと考えた。一方、中国の留日学生の帰国により、「個人」という語は、「個人主義」などの「個人〇〇」と共に中国へ伝わり、中国語においても定着したのである。

第八章では、「part」「a part of」の翻訳を中心に、「一部・一部分・部分」の成立について考察した。「部」と「分」が従来それぞれ独立的な語であったが、明治初期西周によって多く使用されるようになった。『哲学字彙』（1881）では、「part」の訳語として「部分」が使用されていた。また、明治初期では、『明六雑誌』における「一部・一部分・部分」の使用がほぼ西周による用例であり、用例から見れば、「a/one part of～」の場合は、「～の一部・一部の～」が使用され、「全体」に対して「部分」が使われていたことが分かった。また、「一部」は従来、確実的な数詞として使われたが、「不定」の意味を持つようになったのは、「a/one」の影響により「一」には「不定」の意味があるようになったと考えられる。

しかし、本研究で行なった考察は、日本語を中心に据えたものであり、中国語に関する考察は不十分であった。今後は、本研究で得られた方法で、「欧文脈」と「欧化語法現象」の成立をより詳しく調査する上で、日中両言語を対照しながら、近代語彙・語法の成立と日中両言語の相互的な影響を全般的に明らかにしたいと考えた。